

シリーズ「心筋梗塞」②

心筋梗塞の検査とカテーテル治療

国立病院機構和歌山病院

放射線科 鳴坂 源吾(診療放射線技師長)

心筋梗塞と放射線科は種々の検査や心臓CT撮影、血管内治療等で繋がります。

心臓は全身へ血液を送るポンプの役割をはたしています。血液が心臓の左心室から大動脈に送り出されてすべのところで、心筋に血液を供給する血管が開口しており、その血管を冠状動脈とい

います。

その冠状動脈の一部が細くなると、そこから先は血液が通りにくくなりいろいろな症状が現れます。詰まってしまうと血液は流れることが出来ず心筋は壊死して機能しなくなりポンプの役目を果たすことが出来なくなってしまう、これを心筋梗塞といいます。心筋梗塞の約50%は突然起こり、徐々に症状が現れる場合とそうでない場合があるのです。

冠状動脈閉塞の程度を知る検査として心臓カテーテル法、心臓CT等があります。当院にも最新の80列MDCTが導入されます。

ことです。広げる方法は風船を使うバルーン治療と金属のメッシュ(金あみ)を使うステント治療があります。

バルーン治療では、先端にバルーンの付いたカテーテルを狭くなった冠状動脈へ挿入します。ちょうど狭くなった位置でバルーンを膨らませる事により冠状動脈を広げ、そしてバルーンを抜き取ります。

ステント治療では前述のバルーンにステントがかぶさった状態で冠状動脈を広げます。そしてバルーンは抜き取りますがステントはその位置に残し動脈を支えることにより、安定して開通した状態を保ちます。ステント留置部位の再狭窄を抑制するために免疫抑制剤等が塗布された薬剤溶出型ステントなども開発されています。

心筋梗塞は発症すると短時間で心筋が壊死してしまうと言われるため、早く診断し、バルーンカテーテルやステントを使って詰まった冠状動脈の血流を再開する必要があります。強い胸痛やめつけ感など心筋梗塞が疑われる症状が起これば、ためらわずに循環器専門病院を受診しましょう。

詰まった所を広げる治療